

続・ 珈琲の思い出二

優子のお話会に通うようになって、3ヶ月目の時だったか、優子から声をかけられた。

「こんにちは。佑樹くんのお父さんですよ？いつもお越し下さって、ありがとうございます。」

あまりに突然のことに、僕はうろたえ、体中が熱くなった。

「いつも佑樹君が楽しそうにお話を聞いて下さるので、私もすごく嬉しいんですよ。」

そう言って微笑む優子の笑顔に僕は完全にやられてしまった。

「いや、そのですね、ゆ、優子さんのお話がですね、とても、なんというか、す、素敵なのでですね。あの、僕もとても楽しいんだと思います。」

「あはは、ありがとうございます！そう言って下さると嬉しいです！またいらして下さいね。」

全く、支離滅裂である。四十すぎのいい大人が、会社では部下を抱え、いっぱいしの仕事をしている男がこのザマである。首元まで真っ赤になった僕を見て、佑樹にまで「お父ちゃん、どうしたの？お顔が真っ赤になってるよ」と言われてしまう始末だ。

優子はどう思っただろうか？きつと冴えないオヤジだと思っただろう。

次はもつと完全にキメてやる。そう心に誓いながら、僕は店を出た。